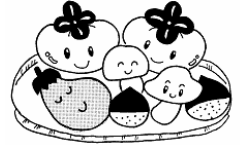
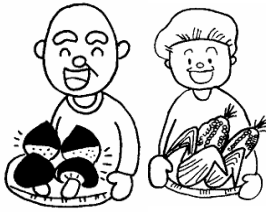


ヘルプステーションだいとう だより

No.11 2005年10月号発行



“フレー！フレー！ヘルパーさん”

事務長 大頭 千恵美

ひよんなことから、カナダ女流作家の『石の天使』という作品を読んだ。

19世紀後半のカナダ、中西部の大平原を舞台に、スコットランド人とアイルランド人を祖先に持つ、移住民の女性の90年にわたる人生を、彼女が生まれた時から、現在を交差させながら描かれていく。

彼女の誕生と同時に母親をなくした主人公は、父親と、叔母に育てられる。商売を営む父は頑固一徹、過酷な自然に囲まれた小さな平原の村で、一応の成功者だった。そんな父の期待を、一身に受けた彼女だったが、父に似た頑固でプライドの高い女性として成長していく。そして父への反発からか、父にない野性的、無教養の農夫と結婚してしまう。厳しい自然に翻弄される農作業に挫折し、勤労意欲をなくした夫は、酒の世界へとのみり込む。生活は困窮し、彼女を支えるものは、次男の存在と父からもらえるであろう遺産であった。同じ村で暮らす父とは結婚後全く交流はなく、父は彼女に何も残さず逝ってしまう。

無能な夫との生活に耐え切れなくなった彼女は、次男を連れ家出、西海岸の都会で住み込みの家政婦として生活を始める。その後、夫の病を知り、息子連れ、再び故郷に一時帰宅した時、夫を見送ったあと、自分には農業が向いている、お父さんの家で暮らしたいと言い始めた次男にがっかりしながら、しかし、それを引き止める力もない彼女。その後、不運な事故で次男を亡くし、傷心の彼女は、故郷を捨て元の住み込みの仕事を続ける。その仕事の報酬として、今現在の家を手に入れる。家の隅々まで自分一人で創り上げてきた大事な彼女の家に、長男の夫婦と暮らしているのが、現在の彼女である。

夫にそっくりな長男を彼女はずっと疎んできた。彼女には彼のやさしさはわかっている。ただ、嫁と共に、自分をこの家から放り出してどこかのナーシングホーム（老人施設）に入れようとしているのが気に入らない。何をしても嫁の手助けが必要になっている彼女は90歳。心臓の悪い嫁の体調も知っているが、やさしい言葉や、思いやりをおくびにも出さない。自分の城であるこの家でなぜ生活できない！との思い、拘束されるような施設での生活をなぜ私が送らなければならない！との恐れから、彼女は不自由な体を引きずって家出を敢行する。息子達の思うままにはならないわ、施設に入るくらいなら、どんなにみすばらしい所でも我慢できる、自分が通り過ぎてきた過酷な人生と重ねながら、家出達成感をしばし味わっていた彼女。が、しかし、身動きならない状態で発見され、病院へ。自由を求めて果たせなかった挫折感。今更、肺がんと告げられても、どうでもよかった。孤独だった。

そんな誇りだけで生きてきた彼女の凍ってしまった自我を少しずつ解き放っていったのが、彼女が忌み嫌っていた大部屋同室の人達の、彼女への語りかけだった。激しい痛みを襲われながら、彼女達を受け入れ、そして、自分も、彼女達に自分の思いを伝えてみようとする。自分の思いを心の中だけに閉じ込めての90年だったがようやくにして人の言葉に、応えてみようと思える自分に初めて気が付く彼女。そして終焉。

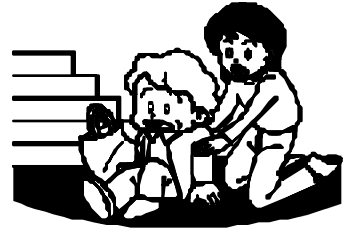
介護保険がスタートして5年半、来春には大きな改正が行われようとしている。より地域に密着した介護サービス、介護度が進まないように予防を重視する制度が新たに施行される。利用者の皆さんの中には、ヘルパーさんの介護支援を今までと同じように受けられなくなる方もあるかもしれない。違った形での予防介護サービスが検討されているが、まだまだ未決定な面も多く、見守るしかない。

しかし、制度が変わっても、私達が自分の家で過ごしたい、家族に大きな負担をかけず、尊厳ある生活を続けたいというこの思いを実現できるサービスが、今現在、存在するということは本当に有り難いことと、改めて現行の介護保険を省みる。

“頑張れ！ヘルパーさん。”

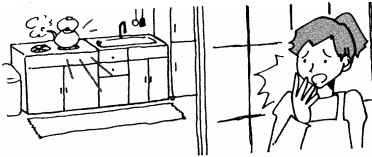
主人公の女性も身近に寄り添うヘルパーさんからの支援が得られればきっと違った老いを過ごせた事だろう。

介護事故



安全確認

ポットのお湯を補充するためガスコンロに火をかけたが次の訪問に気が取られて火をかけたことを忘れていた。家人が気づき火を止めていた。



《原因》

気の緩みから安全確認を怠っていた。

《今後の注意点》

事故を防止する為、何度も再確認しチェックミスを二度と起こさないようにする。又、どこの訪問先でもありえることなので全ヘルパーに事故の内容を伝え再確認してもらいましょう。



入浴介助

洗身を行うため浴槽からイスに座る時にイスを壁際に置いていたため身体が熱湯管にあたってしまった。



《原因》

洗い場の広さを把握していなかった。

《今後の注意点》

安全確認も大切なことなのでイスの配置にも注意を払いましょう。



調理

利用者と一緒に調理を行い、鍋の中に入っているお湯を捨てる時、お湯がはねてそばにいた利用者の手にあたってしまった。



《原因》

周囲の配慮まで出来ていなかった。

《今後の注意点》

お湯を使用する時はそばに誰もいないか確認してから捨てましょう。



ヘルパーミーティング

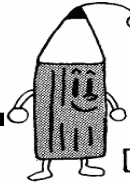
介護の現場では、医療行為の線引きが難しく訪問先で判断に迷うことがあります。6・7月のミーティングでは医療行為もしくはヘルパーの業務のどちらにあたるものなのか？どのような場合に行っても良いのか？などについて話し合い、ヘルパーから出た意見を下記にまとめてみました。



疑問や行ったこと



- Q. 爪切りはしてもいいのか？
- Q. 服薬確認と服薬管理の違いは？
- Q. 血圧測定はしてもいいのか？
- Q. 髭剃りはしてもいいのか？
- Q. シップ、バンドエイド、せんねん灸を貼ることはいいのか？
- Q. 薬の塗布（例：かゆみ止め、水虫の薬、市販の薬、古い薬など）はしてもいいのか？
- Q. 散髪や毛染めを頼まれて困ったことがある。
- Q. リハビリの声かけや援助はしてもいいのか？
- Q. 褥瘡ができた時の処置はどうすればいいのか？
- Q. 肩を揉んでほしいとかマッサージをしてほしいと言われたことがあった。
- Q. 座薬を入れてほしいと言われたことがあった。
- Q. 市販の浣腸はしてもいいのか？
- Q. 褥瘡以外の処置はしてもいいのか？（ガーゼ交換など）
- Q. 訪問先で利用者や家族にヘルパーは介護の勉強をしてきたのだから、医療行為はできると思われて困った。
- Q. 家族が出来るのになぜヘルパーができないと言われたことがあった。



行ってしまった理由は…



- ★ 医療行為と知らずに行ってしまった。
- ★ 家族や利用者に頼まれて断りきれずに行ってしまった。
- ★ 複数のヘルパーが訪問していた時、他のヘルパーが行っていた。又、個々に対応が違っていた。

等の意見が上がってきました。



医師や看護師の免許を持たない介護職などが医療行為を行うことは医師法などで禁止されています。医療行為が必要になった場合や緊急時にはヘルパーの自己判断で行えないのです。だからこそ現場ではすぐに指示がほしいという声も聞かれます。

在宅介護では、身体介護・生活援助だけではなく、医療的な手助けを希望しているのが現実です。現場では判断に迷うことも多く、安易な思いや考えで医療行為をする事の怖さがあります。

今後は在宅にも医療的な処置の必要な人が増えて多くの課題が出て来ることになるでしょう。今まで以上にケアマネ、医療関係との連携を密にとっていくことが大切になってきます。よい意見やアドバイスがあればよろしくお願いします。



認知症は直前に体験したことを忘れてしまう「もの忘れ」時間や場所、自分と周囲との関係がわからなくなる「失見当識」今まで出来ていた選択や決心が出来なくなる「判断力の低下」などが起こります。人によっては妄想、幻覚、躁うつ等の精神障害や徘徊、失禁、ろう便などの問題行動がみられます。そのため生活の場で失敗が多くなり、危険を伴うようになります。また、生活が困難になりますので、周囲の人たちの理解が必要となるでしょう。



自尊心を傷つけるような態度や言葉は厳に慎む。(間違っただ行動や理解できない行動を否定しない。)

出来ることを探し本人のもてる能力を大事にした援助を心掛ける。(出来ることをしてもらうことで自信がついて精神的に安定します。)

孤立しがちなので話を聞くだけでも随分気持ちもちが落ち着きます。



本人のペースに合わせる。(せかされると誰でも慌ててしまいます。)

話をする時はわかりやすい言葉で伝える。又、同じ目線で話しかけることが良いです。

長年住み慣れた環境は安心につながるため急激な環境の変化は避けた方が良いでしょう。

言葉だけではなく手を握るなどのしぐさは不安や寂しさを和らげることがあります。

ヘルパーの声

認知症というと、すぐにある方を思い出す。私自身、アルツハイマーという言葉も耳慣れていない時、82歳の一人暮らしの女性を訪問、ケアをさせて頂く事になりました。今から思えば経験のない故に、変に構えもせずその方との一年近くを可笑しくも楽しく共有共有できたのではと懐かしく思います。唯々、無事を念じていたので、訪問時、在宅されていればほっとし、廊下に尿を漏らされているようが、米びつに便がころんと混ざっているようが、“あら、まあ”の感覚で処理し、楽しみにされている食事作りとお話を聞く事に専念、毎回びっくりこっくりする事もありました。が、ある日、訪問すると不機嫌な顔、「どうされましたか？」の問いかけに「少しも美味しくないのよ」と口を開けられた途端、歯が便で真っ黄黄。研修では聞いていましたが・・・「ごめんなさいね。お腹空いていたんですね。すぐにご飯を作りますね。」と泣き笑いの中、必死で口内洗浄をしました。

その後、施設に入所されましたが、その方との出会いがその後、私のヘルパーの仕事にどれ程役に立っているか、向き合い、受け入れる事の大切さを教わりました。この間、訪問の空いた時間に、文学館に足を向け、常設展で目にした一句「風にまた 勢を貰いて 鯉のぼり」印象に残りました。利用者様や家族の方にいい風が送れるよう努力したいです。



ヘルパー 中谷 喜代美

私もヘルパーとして働き始め今日まで多くの利用者との出会いがあり、認知症の方と接する機会も増えてきました。その中でもAさん宅では、ご夫婦共に認知症がありましたが、日中の殆どをお二人で過ごされていました。日々穏やかに習字や読書で過ごされているご主人も、外出すると自宅に戻ることが出来ず、ヘルパーが探しに行くこともありました。又、奥様は体調不良と寂しさからヘルパーが訪問すると、ご自身の現状を訴え続け、ヘルパーが聞き役になることで険しかった言葉や表情が次第に落ち着いてきました。又、買い物も行く度に同じ食材を購入されることも度々ありました。

訪問の都度、声掛けなどの対応をするのですが、限られた時間でのケアの難しさを痛感しました。利用者の心境の変化を観察し、出来る限り、利用者に精神的な安心が得られる様、支援させて頂きたいと思っています。

ヘルパー 中村 尚子



平成17年10月より

ゴミの出し方が変わります



可燃ごみは指定袋制になり、今までの黒い袋、青い袋、スーパーなどのレジ袋、紙袋では出せなくなります。



パッケージや箱の裏にマークが付いていますので参考にして分別をしましょう。



食品が付着し取れない場合は可燃ごみに出しましょう。



ゴミの捨て方は各自治体によって違いますので、その決まりを守ってリサイクルできるものは分別し、できないものは可燃や粗大ごみに出しましょう。



生ゴミは新聞紙に包んで捨てると悪臭を防いでくれます。



伝言板



利用者様の声、家族介護等の日常のエピソード、俳句・短歌・川柳・詩・挿絵、制作作品の写真等々ございましたら掲載させて頂きますので、ご協力の程、宜しくお願いします。



・ 私たちの基本理念 ・

私たちは日常生活の支援を通してその人がその人らしくあることを守ります。

ヘルパーステーションだいとう



〒670-0962

姫路市南駅前町66番地 戸田ビル2階

TEL 0792-23-5009

FAX 0792-23-5019

介護保険事業所番号 2874000876